

靴  
紐  
結  
び  
と  
王  
様



むかし、ある国に靴紐結びの男がいました。彼は王様の靴紐を結ぶことを生業とし、王宮から給料を貰っていました。

ある日王様が言いました。

「おまえのような有為の若者を靴紐結びごときに置いておくのは国家的損失だ」

「はあ…」

「すまなかつた。これからわしは、靴紐ぐらいは自分で結ぼうと思う」

「はあ…」

「おまえは王宮を出て、社会の中で自由に自分の才能を試せ」

「はあ…」

「まだわからんのか。おまえはクビだ」

「——えーッ？」

靴紐結びの男は、憔悴して家に帰り妻に相談をしました。

「じゃ、靴磨きでも始める？」

と、努めて明るく妻は言いました。

彼は、なけなしの貯金をはたいて道具一式をそろえ、街角で靴磨きを始めました。しかし、新参者の彼がすぐに収入を得られるほど、業界は甘くありませんでした。

「どうすんのッ。明日の食物も買えないじゃない！」

彼を叱責する妻の声は日増しに厳しくなっていきました。

焦った彼は、顧客確保のため靴磨き料金を他より安くしました。

少しは仕事が増えましたが、料金が安いので休日もとらず毎日夜遅くまで必死でかなくてはなりません。かわいいわが子とふれあう機会もなくなりました。

そのうち、他の靴磨きも料金を安くするところが増えました。他の靴磨きも必死なのです。彼はまた仕事が減りました。

「わたしも働くわ」

と妻が言いました。

「でも子どもを預けなくちゃ」

「託児所の料金って高いんだろ？」

「だけど、このままじゃ…」

「——何か資格を取ろうか」

「そんなお金どこにあるの」

「誰かに貸してもらえば…」

「ヤミ金融以外に誰が貸してくれるっていうのよ！」

「…」

「…」

「…お、俺パチンコ行ってくる」

「もう嫌ッ！　こんな生活…！」

そのころ、王宮では会議が開かれていました。

「貧乏のあまり生活できなくなる者が増えておると聞くが」

と、王様。

「そんなことはございません。国民の平均年収は1千万円です。なんと、上位20%の平均が4千万円を超えております」

と、大臣。

「ほう。それならば問題ないな」